

日本語習熟度と情意要因

村野 良子

キーワード：言語習得 情意要因 高校留学生 社会的距離 動機づけ

〔要旨〕 言語習得に見られる個人差については、様々な要因が相互に関連しながら関与していることがこれまでの研究においても示唆されている。小論はパイロットスタディとして言語習得に関連する要因の中で社会的距離と動機づけを取り上げ、11か月の間日本でホームステイしながら高校に通った留学生を対象として、日本語の能力との関連をみる。

1 はじめに

1. 本稿の概要

本稿では日本で生活する外国人の日本語習熟の程度が動機付けや社会的距離といった情意要因とどのように関係しているのかという問題を取り上げ、主に英語の習得研究の分野で作られたモデルや仮説を用いて検討する。

2. 留学生と日本語

3月に来日した留学生Nが初めてS家の人々と対面したとき、彼女は「Nです。こんにちは」と言えるだけだった。それからはホストファミリーの一員として日々の生活を送り、高校生として授業や部活、行事などの活動に参加しながら、日本の生活を体験してきた。帰国が間近になった1月、Nは電話で約束をしてバスや電車を乗り継いで一人で待ち合わせの場所まで出向くことができた。道がわからなくなったら、誰かに聞くこともできた。約束の時間に5分遅れたNは、待っていてくれた相手に遅れた理由を言って詫びることもできた。そして後日、親切にしてもらったお礼の手紙を日本語で書いた。2、3の表現に、ぎこちないところがあったが、ほぼ1ページの手紙は、日本人の高校生が書いたと言われても、そのまま信じてしまっただろう。

留学生Kは、11か月も日本で生活するのだから、日本語をマスターできると思っていた。外国語は得意のつもりだったから、言葉については、余り心配していなかった。社交的な性格も手伝って、スタートは好調だった。簡単な単語はすぐ覚えた。英語と少しばかりの

日本語の単語ができれば、毎日の行動には困らない。他の留学生仲間と一緒にいる時は、英語で話していたから気がつかなかったが、1月に他の留学生が日本語で自由に意見を言えるようになっていたことを知ってショックを受けた。行動範囲も広くなり、日本人の友達もできたが、少し話が複雑になると英語になってしまう。帰国を目前にして、もう少し日本語が上手くなるはずだったのと思うこともある。

留学生NやKは特別な事例ではない。高校生留学では、日本語の習得は留学の副産物と考えられているが、外国人であることを意識させないくらい自然な日本語を話すようになる生徒がいる一方で、簡単なことも日本語で言えない生徒もまれにいる。

このような日本語習熟度の差をどう説明すればよいのだろうか。「学習意欲がない。ホストファミリーと問題があった。ホストファミリーは英語を話したがっていた。日本が好きじゃないらしい。ホストスクールが合わなかった。日本語を指導してもらった機会がなかった。適応に問題があった。留学生仲間で行動することが多かった。サポートの態勢に問題があった。」など、殊に日本語の上達が期待通りではなかったようなとき、留学生を支援している者たちは、個別の事例について、その原因をあれこれと推測する。学習意欲や周囲の環境の問題などが日本語習得に影響しているらしい、留学生の異文化への適応状況とも関連がありそうだ、と経験的に感じてもある。「インドネシアやタイなどのアジアの生徒は上手になるようだ。今までの生徒の中で一番言葉が上手になったのはスリランカの生徒だった。」など、言葉の上達度は出身国とも関係がありそうだというのも、支援者達に共通する印象のようである。

言葉ができるようになれば、それだけ異文化体験を豊かにすることができる。もし言葉の上達が留学生の日本文化への適応と関係があるとすれば、なおさら留学生の日本語の習熟度に影響を与える要因が何かということを知りたいと思う。日本語の習得の障害となっている要因を把握し、問題に対処していくノウハウを蓄積していけば、サポートの質を高めていくことが期待できるかもしれない。そのためには、これまで個別の事例のエピソードの域にあったものを、実証的な研究によって一般化することが必要である。実証的な研究は、数量的に全体像をつかむことと幾つかの事例研究によってよりきめ細かな分析をすることのふたつの側面から行うことができるだろう。

3. 第2言語習得の個人差と言語と適応に関するこれまでの研究

3-1 第2言語習得における個人差の研究

第2言語習得の場面で見られる個人差の問題は、第2言語習得研究の分野の主要な謎の一つであり(Larsen - Freeman and Long,1991)、個人差を説明するために、色々な角度からのアプローチが考えられる。まず、習得の成功に影響する要因の中には、教育(教師、教授法、教材、カリキュラム、その他)や、場面や条件(学習している言語の話され

ている社会の中かどうか、学習している言語を使う機会があるかどうか、学習環境はどうか、など)のように外在的な要因がある。一方学習者に内在する要因として、学習者の母語、年齢、適性、社会的心理的要因、性格、認知スタイル、学習ストラテジーなどがある。後者の学習者要因と呼ばれる要因をSkehan(1989)は、情意要因と認知要因に分類しているが、本研究では、情意要因の中から主に社会的心理的要因をとりあげる。

3-2 動機付け

最近の応用言語学の研究の主流ではないが (Graham and Schmidt,1991)、社会的心理的要因の一つとして動機付け (motivation)をめぐり一連の研究がある。動機付けと第2言語習得の成功との関連を統計的に明らかにしようとした研究は、Gardner and Lambert (1972)に始まる。彼らは、動機付けを統合的動機付けと道具的動機付けと言う二つの概念を導入することによって分類した。統合的動機付けは学習者が学習している言語を話す社会の一員になりたいと思っているとき、道具的動機付けは、学習者が仕事や社会的ないい地位を手に入れるため、いい成績を取るためなどの、実利的な目的で学習することをさす。彼らは統合的動機付けの方が道具的動機付けよりもより強く第2言語習得の成功と関係があるという仮説を立てた。この仮説はモントリオールのフランス系カナダ人を対象とした調査では実証されたが、フィリピンやメインでの彼等自身の調査や、それに続く調査 (Lukmani 1972, Burstall 1975, Dornyei 1990, Ramage 1990など) では反論あるいは、修正されている。

統合的動機付けと道具的動機付けと言う概念による研究には、二つの問題点が指摘されている (Larsen - Freeman and Long 1991, Au 1988, 小西 1994)。一つは、これら二つの概念の定義が、研究者によって異なること、もう一点は、学習環境と学習者を取り巻く社会的政治的状況の違いを考慮しなければならないという点である。

Gardner and Lambertに始まる第2言語習得と動機付けの一連の研究は民族のアイデンティティーの問題と深く関わっている。カナダやアメリカ合衆国のような多文化多民族社会の事例 (Spolsky 1969, Giles 1979など)、あるいは英語という支配者の言語を学習する事例 (Lukumani1972, Gardner and Lambert 1972、Kachu 1977など)、バイリンガリズムとの関連における研究 (Baker 1988) がその例である。

しかし第2言語、あるいは外国語の学習の成否が、最終的にはその言語を話す集団に同化したいという動機付けと最も強く関連する、あるいはしないという議論は、日本の様な社会的状況の中で説得力があるとは思われない。場面によっては、「heavy cultural loadingを課さない状況もあるはずだ」 (Brown 1987,p.123)という前提にたって、動機付けを構成する要素を検討し直してみる必要があるだろう。その意味で最近の小西 (1994) Konishi (1991、1992)に見られる日本の英語教育の場面での生徒の学習動機の研究は意義のある試みであろう。

3-3 態度

Gardner and Lambert (1959、1972) は、第2言語の習熟度に関連する要因の一つとして、学習者が学習言語の文化集団に対して持っている態度を挙げている。これはカナダにおける調査の因子分析によって得られた結果である。肯定的な態度は動機付けを強め、その結果上達につながる。一方否定的な態度は逆に動機付けを弱め、上達を妨げると言う議論は受け入れられやすい。しかし年少者の場合 (Macnamara, 1973、Hayaman, 1980) や、否定的な態度がより強い動機付けに繋がる事例 (Oller, Bava and Vigil 1977) など Gardner and Lambert の仮説と矛盾する研究も多い。このような結果は学習者は肯定的な態度も否定的な態度も合わせ持っている (Brown, 1987) という事実や、態度は学習言語の話者との接触の量や質によっても変わる (Gardner 1980, Brown, 1987) ことから説明できる。しかし言語学習の習熟度と態度との関係を考える時に、成功が動機付けを高め、ひいては肯定的な態度をもたらすという事実もあることを覚えておかなければならない。この点を指摘して Larsen - Freeman and Long (1991) は、態度要因と習熟度の関係、さらに社会的心理的要因と習熟度の関係を Le Mahieu (1984) の以下のスキーマによって示すことができるという。小西 (1994) は、Le Mahieu をさらに修正したモデルを提案している。

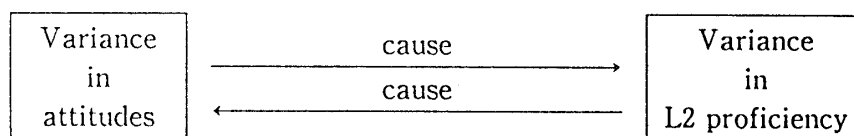


図1 Le Mahieu のモデル (Le Mahieu(1984))

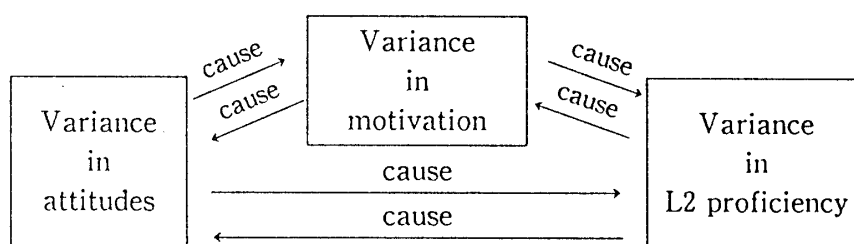


図2 小西のモデル (小西 (1994))

3-4 社会的距離

社会的距離という概念は元来社会学の用語である。Bogardus(1953)は社会的距離を個人と個人、個人と集団、集団と集団の間に働く sympathy understanding の程度であると定義している。Bogardusによれば、sympathy は好意的な反応であり、understanding も、好意的な行動をもたらすような知識である。社会的距離の下位概念である racial distance のスケールは人種差別や偏見の調査に使われる。

Brown (1987)は第二文化の学習との関連で社会的距離を論じている。彼によれば、社会的距離という概念は、二つの文化が接触するときに個人が感じるその二つの文化の情意的認知的距離である (Brown 1980)。Larsen - Freeman and Long (1991)は、態度要因の一つとして分類しエスニシティという要因の中で扱っているが、ここではBrownの分類に従って社会的距離と第二言語学習に関する先行研究を見てみたい。

Schumann(1976)は社会的距離は支配の型、凝縮性、統合の型、同一性、態度、滞在期間、集団の大きさ、囲い込みなどの因子によって構成されていると考える。彼はこれらの因子を用いて、よい学習環境と悪い学習環境に関する仮説を提出している。Schumannの仮説では、二つの文化の社会的距離が大きければ、第二言語学習が困難であり、逆に社会的距離が小さければ習熟度が高くなる。しかしSchumannの仮説では社会的距離を測定して数量化することはできない。

Acton(1979)は知覚された社会的距離/P D A Q (Professed Difference in Attitude Questionnaire) と呼ばれる測定方法を使って、社会的距離を数量化することを提案した。Actonは、第二言語習得の成否に影響を与えるのは、二つの文化の距離ではなく、個々の学習者が自分と学習言語の文化、自分と自分自身の文化をどう知覚しているかであると考え、様々な概念に対して学習者が感じる態度を、自分と同国人、自分とアメリカ人、アメリカ人と同国人の三つの次元で判断させ、それぞれの距離をSD法を用いて数量化する方法を考えた。Actonはこの方法によって、よい学習者を特徴付ける最も適当な社会的距離を算出した。彼の仮説によれば言語学習に成功した学習者は自分を自国の文化と、アメリカ文化の両方から等しく離れた位置に置いている。そしてその時期は、アメリカに来てから4か月目であると結論付けている。

Actonの仮説はBrown(1980)によって文化学習と言語習得を関連づけるモデルの根拠となったが、Larsen - Freeman & Long(1991)は、Actonが社会的距離を数量化したことの意義をみとめながらも、測定方法とその結果に対する疑問を指摘している。しかし日本語学習者を対象として、習熟度と社会的距離の関係を調べた内海 (1990) は、Actonの仮説がある程度証明できたと報告している。内海は先行研究から文化習得のモデルを作成し、文化習得の段階毎に、内的社会的距離 (ActonのPDAQを内海はこのように翻訳している) がどのような特徴を示すかについて調査している。

II この調査のデザイン

1. 研究の目的

筆者が取り組んでいる課題は、高校留学生の日本語習得と文化適応をテーマとするものである。そこでは長期的な調査によって日本語習得の過程を記述すること、高校留学生の

日本語習得に関わる諸条件／諸要因を記述し、習熟度に影響を与える要因は何かを探ることから、高校留学生の文化学習と言語学習のモデルを作成しようと考えている。

2. 事前調査の概要

上記の研究のための事前調査として、1993年の5月から2月にかけて、高校留学生25名を対象に小規模の調査を実施した。この調査では、被験者に録音テープによって口頭能力を記録することのほかに、日本の文化に対する意識や異文化間の問題、問題が起こった時の対処の仕方を記録してもらった。この外に日本語能力の把握のために、文法練習用問題と作文の宿題を課した。この調査は上記の期間中2か月毎に郵送によって行った。ここに報告するのは、その調査の一部である。

本稿では、次の2つの問題について考察したい。

1. 情意要因の中で日本語習得に成功した学習者を特徴づける要因は何か。
2. 日本語の習得と学習者が日本に対して感じる社会的距離の間に関係があるか。

2. 研究の方法と手順

2-1 被験者について

このプロジェクトに参加したのは、3月に来日し日本人のホストファミリーと一緒に生活しながら高校に通う高校留学生である。5月にこのプロジェクトに志願して参加した留学生は25名だったが、小論のためのアンケートに回答を寄せたのは13名（社会的距離の調査に関しては11名）である。回収率が悪かったのは、アンケート発送と回収を行った1月は、留学生が帰国準備のため多忙であったためであろう。被験者の内訳は以下のとおりである。

表1 被験者の内訳

生徒	国籍	性別	年齢	言語環境	適正	学習年数	自己評価	評価
A	AUS	女	15	M	3	3	8	A
B	AUS	女	15	M	3	0	7	A
C	NZ	女	18	S	2	5	7	A
D	ルウイ	女	17	M	3	0	6	A
E	AUS	女	17	S	2	4.5	6	A
F	NZ	女	16	S	2	2.5	5	B

G	イタリ	女	17	M	1	0	8	B
H	AUS	女	16	M	2	1	7	B
I	イ	女	16	M	1	1	6	B
J	イタリ	男	17	M	3	0	7	B
K	US	女	16	S	1	0	7	C
L	AUS	女	18	S	2	4	7	C
M	NZ	女	18	M	2	0	5	C

2-2 調査の方法

この調査に使用した質問表(資料)は3つの部分からなる。(i)は、日本語能力の自己評価、(ii)は動機付けと態度に関する調査項目、(iii)は、社会的距離を測定するための質問表である。

(i) 日本語能力の自己評価

日本語能力の自己評価は、8つの項目について該当する項目を選択する方式を用いた。そのうちの4項目は口頭能力と聴解能力、2項目は読む力、2項目は書く力を判定するための簡単な質問である。項目の設定は、1991年から1992年にかけて筆者が行った留学生の調査で得られた1年間の上達度に関する資料を基にして作成した。

(ii) 動機付けと態度に関する調査項目

事前調査という性格から、ここではこれまでの研究で使用された項目をできるだけ取り上げ、一つの傾向を見たいと考えたので、動機付けと態度に関する質問事項は、Gardner (1980)、Spolsky (1969)を参考にして、日本の高校留学生の実情に合うように書きかえて使用した。質問項目は25の文からなり、それぞれ5つのスケールから、該当するものを選択するようになっている。文は、「日本語を勉強することは、将来の職業のために有益である」のような肯定的な内容の文と、「日本語を勉強することは時間の浪費である」のような否定的な内容の文を混在させた。

動機付けと態度に関する25の文は、内容的に7つのグループに分類できる。

- I. 異文化と言語に対する興味と関心
- II. 日本人に対する肯定的な態度
- III. 日本語に対する肯定的な態度

IV. 統合的動機

V. 道具的動機

VI. 日本語学習と日本への留学に対する親（本国の親）の態度

VII. その他 日本語上達度に対する満足度

日本人との結婚に対する肯定的な態度

日本国籍の取得に対する肯定的な態度

Gardner(1980)では、統合的動機は、「日本人のようになること／同化すること」を意味していたが、これまでの調査（村野 1993）からGardner(1980)の定義は高校留学生の実情に合わないことが明らかになった。そこでこの調査では統合的動機と道具的動機を次のように定義することにする。

統合的動機は日本の社会や文化について理解を深めるために、あるいはできるだけ多くの日本人と知りあい、いろいろな活動に積極的に参加するために日本語を学習したいと思う態度、道具的動機は将来の仕事のためや大学の入学試験のために日本語を学習したいと思う態度とする。

「その他」の中の「日本人との結婚に対する肯定的な態度」は、Bogardusが社会的距離の中の人種間の距離を測定する項目として用いているものである。

(iii) 社会的距離

第三部ではActonの考えた測定法であるP D A Qを用いて社会的距離を測定する。P D A Qはある概念（項目）について被験者がどのように感じているか、母国の人はどう感じているか、学習言語の集団（この場合は日本人）はどう考えているかを被験者が判断して、Likert scale によって回答する方法である。S D法では、一つの項目について多くの形容詞を出して、被験者がその項目に対して抱くイメージを測定するが、P D A Qでは20の概念（項目）について、それぞれ2つの形容詞を用いる。後者の利点は、項目の数を多くすることによって、文化のより多くの側面を取り上げることができることであろう。形容詞の数を少なくしているのは回答に要する時間を短縮するためであるが、社会的距離の測定という目的のためには、形容詞の数は2つで十分であろう。次の例でP D A Qの方法を見てみよう。

				女性									
	S	<u>X</u>	:	___	:	___	:	___	:	___	:	___	
つよい	C	___	:	<u>X</u>	:	___	:	___	:	___	:	___	よわい
	J	___	:	___	:	___	:	___	:	___	:	<u>X</u>	___

上の例では、概念は「女性」であり、強い、弱いという二つの形容詞を用いている。被験者自身は女性は大変強いと感じているが、自分の国の人々は、女性がかかなり強いと感じているだろうと思っている。しかし日本人は女性をかかなり弱いと思っているという意見で

ある。この場合、 $SC = 1$ 、 $SJ = 5$ 、 $CJ = 6$ と数量化する。Actonは6つのスケールを使っているが、予備調査では中立的な態度も認めることにし7つのスケールを採用した。

Ⅲ 調査結果と分析

1. 言語の習熟度

能力の自己申告は、能力を記述した8つの文を読んで自己評価をするというものであった。予期されたように自己申告による能力の評価（「II 1.被験者について」の表の自己評価の欄に記された数値は8つの項目のうち、被験者ができると答えた項目の数である）は、筆者が録音資料やジャーナルから得た被験者の能力についての印象とかなり異なっており、習熟度を測る方法としては適当ではなかった。そのため習熟度は筆者の判断によって、表の評価の欄にABCの3つのランクに分けて記載した。

2. 情意要因と言語習熟度の関係

次ページの表2はスピアマンズリョウによって、25の項目と日本語の習熟度の相関関係を見たものである。25の項目の中で、否定的な内容の文は、肯定的な回答に直したうえで数値処理を行った。

この結果で見ると、日本と日本人に対する肯定的な態度（15と24を除く）と統合的な動機要因が他の群に比べて習熟度とのより高い相関関係が認められるようである。日本語に対する肯定的な態度と習熟度とのあいだには、統計的に意味のある相関は見られない。道具的動機の、9.「将来の仕事のために日本語が必要である」、25.「日本語ができると、母国で尊敬される」の二項目についてみると、25には弱い相関が見られるが、9は全く関連がない。これは次のように説明できるのではないかと筆者の調査によると（村野1993）9割以上の留学生が日本語の知識が将来の仕事に有利になると考えており、留学目的が日本語の学習である生徒も多い。日本語の実用性については留学生は習熟度に関係なく同じような認識を持っている。25については、オーストラリアやニュージーランドの生徒の場合は日本語の上達によって帰国後の日本語学習や大学入学試験が有利になるといった背景があるからであろう。

また予期されたことであるが、親の態度と習熟度にはまったく相関関係がみられない。これはカナダにおけるフランス語の学習について調査したGardner and Lambert(1972)の結論と異なる点である。同様に「日本人との結婚や日本人になること」にも習熟度との統計的に意味のある関連は認められなかった。

表2 Spearman's rhoによる情意要因と習熟度の相関関係

I 外国語や異文化に対する関心

文番号 相関

2. 0.362 外国人と会ったり話したりすることが好きだ。
 3. 0.060 外国語を学ぶことは楽しいし大切だ。
 16. 0.641 外国語が話せるようになりたい。

II 日本人に対する肯定的な態度

4. 0.369 日本人は親切でやさしい。
 12. 0.314 日本語学習より日本について学びたい。
 15. 0.055 またすぐ日本に戻ってきたい。
 19. 0.393 日本人と親しくなるにつれて言葉が上手になりたいという気持が強くなった。
 23. 0.256 日本の文化と社会が好きだ。
 24. 0.083 もう日本に戻りたくない。

III 日本語に対する肯定的な態度

11. 0.246 日本語の勉強は時間の無駄だ。
 5. -0.071 日本人と同じように日本語ができるようになりたい。
 6. 0.129 英語で用が足りるので日本語の勉強は必要ない。
 8. 0.363 帰国したら、日本語の勉強はやめる。
 13. -0.071 できるだけ日本語の勉強をしたい。
 14. 0.060 日本語の新聞を読んだり、テレビを見たりしたい。
 22. 0.596 日本語は今の世界で重要な言語の一つだ。

IV 統合的動機

7. 0.236 日本語を勉強することは日本の文化や社会、文学をよく理解するために重要だと思う。
 10. 0.519 日本語を勉強することは、日本人と友達になったり一緒に色々な活動に参加したりするために重要だと思う。

V 道具的動機

9. 0.098 日本語を学習することは将来の仕事の為に重要だ。
 25. 0.454 日本語ができると、わたしの国で尊敬される。

VI 日本語学習や日本留学に対する親の態度

20. 0.169 国の両親は日本語を勉強するように働き掛けた。
 21. -0.044 国の両親が望んだから、私は日本に来た。

VII その他

17. 0.009 日本人と結婚してもいい。
 18. 0.005 日本に帰化してもいい。
 1. 0.118 日本語の上達に満足している。

3. よい学習者を特徴づける要因

被験者を習熟度別に分けて、情意要因との関連を比べてみた場合、習熟度の高い学習者とそうでない学習者の間に差がみられるだろうか。この調査では、「III. 1. 習熟度」で述べたように被験者の日本語能力をA B Cの3ランクに分けた。被験者の数が13名しかいないことを考慮し、AとB Cグループの二つに分けてそれぞれのグループの平均値を項目群別に示したのが以下の表3である。

表3 動機づけおよび態度要因と習熟度の関係

	グループA	グループB C
外国文化に対する関心	4. 9 3	4. 6 3 9
日本人に対する肯定的な態度	4. 4	4. 2 1
日本語に対する肯定的な態度	4. 6 6	4. 4 5
統合的動機づけ	4. 7	4. 5 8
道具的動機づけ	4. 1	3. 8 3
親の肯定的な態度	3. 6	3. 8 7
そ の 他	3	3. 5 3

日本語習熟度が高いと判定されたグループAとそうでないグループB Cを比べると、「親の肯定的な態度」と「その他」の群を除けば、僅かずつではあるが、AグループはB Cグループより高い平均値を示している。

4. 社会的距離

P D A Qによる測定の結果を、3つの方法で処理する。

1. 自分と自国の人との距離 (S C)、自分と日本人との距離 (S J)、自国の人と日本人との距離 (C J) を数値化し、S CとS Jの関係を見る。
2. S C, S J, C Jの関係を相対化し、三者の関係を見る。このために、次のような操作を行い、(X, Z) の関係を見る。

$$S C : S J = X : Y$$

$$X + Y = 100$$

$$Z = C J / (S C + S J + C J) * 100$$

3) SC = SJからどのくらい離れているかを測定する。

Actonの仮説では、目標文化に四か月以上滞在し、かつ習熟度の高かった学習者は、二つの文化から自分を等距離に置いている。即ちよい学習者はSC = SJに近い距離を持つと言う。表4は二つのグループのSC, SJ, CJ, X, Y, Zの平均値、およびSC = SJからの距離(PDAQの値)の平均値をしめしたものである。グループAはグループBCよりもSC, SJとも平均値が小さいがSC = SJからの距離であるPDAQの値には差はあまりない。この値はActonの研究において、目標文化に到着して間もない習熟度が高い学習者グループに示した値にほぼ等しい。また両方のグループとも、自分を日本文化より自文化に近いと認識している点では同じであるが、グループAのほうが自文化により近いと感じている。BCは自分を自文化と日本文化の両方から離れていると感じていることがわかる。

X, Y, ZはSC, SJ, CJの値を比に直したものであるが、グループAは自分自身を自文化に近く、日本文化からは遠くにいると感じている。BCグループはAに比べ自文化とは距離を感じているが、日本文化に対する距離はAより小さい。自文化と日本文化の距離についてみると、Acton (1979) の4つのグループとの比較では、A, BCともに近いと感じていると言えそうあるが、内海 (1990) の調査数値と比較すると両方のグループともに二つの文化の距離をどちらかと言えば離れていると感じている。

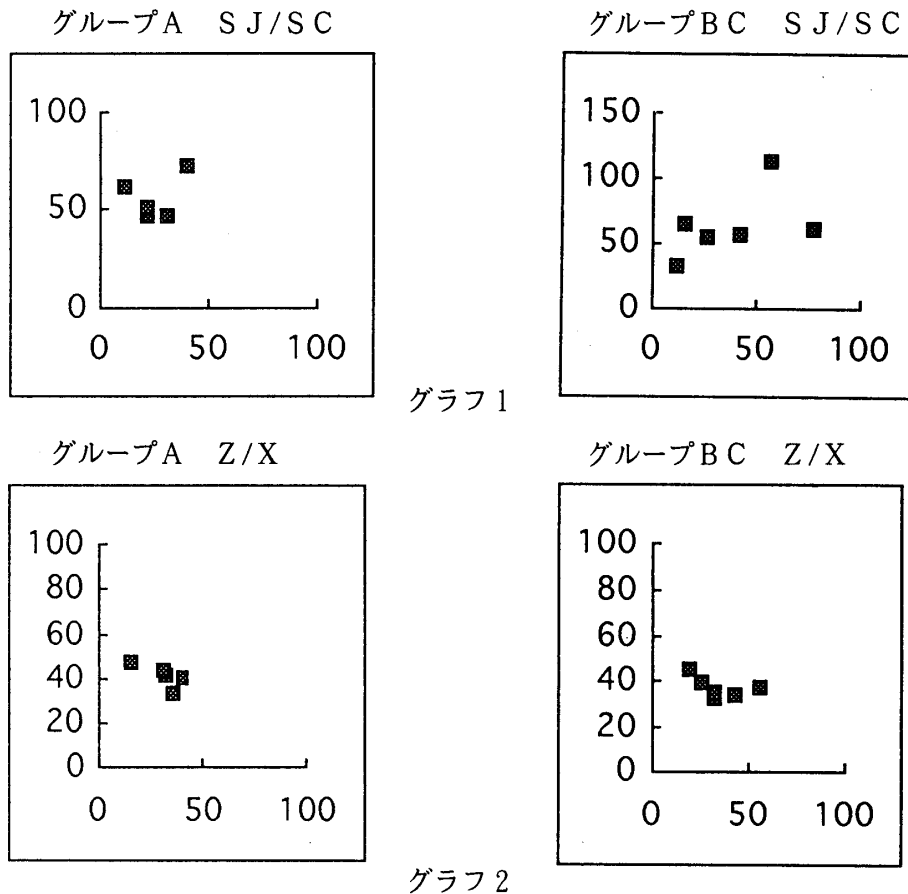
表4 グループAとグループBCの平均

	SC	SJ	CJ	PDAQ	X	Y	Z
GroupA	25	55	55	20.93	30.95	69.05	40.86
GroupBC	39	63	58	21.1	35.82	64.18	36.91

グラフ1は、グループAとグループBCのSCとSJの関係の分布を見たものである。グループAは分散がY軸に近づいて集中した型になっている。一方BCは拡散した型である。グラフ2はSC, SJ, CJの比率に注目して三つの関係を2次元のグラフになおしたものである。X, Y, Zに直すことによって、3つの距離をSC, SJ, CJの数値の大きさに関わりなく距離の比率としてみることができる。Xは自分自身と自文化、Yは日本文化との距離を比で表した値であり、Zは全体にしめる2つの文化の距離の割合である。

グラフ2においても、Aは自文化との距離を近く感じており、BCにはバラツキが見られる。全体のなかにしめるZの割合はY軸に示されるが、この二つのグループ間に異なりは余り見られない。XYZで表されたPDAQの関係では相殺されてしまうのであるが、実際のSC, SJの数値はグループAとBCにはかなり差が認められる。Actonはこの数

値の違いについては言及していないが、言語習得と第2文化の学習／文化適応と関連があるのではないかと。より多くの被験者による調査ができれば、なんらか傾向が見えてくるのではないかとと思われる。



被験者の数が少ないので、結論めいたことは言えないが、11名を2つのグループに分けてPDA Qの分散を見た場合、習得度の高いグループは自文化との距離を近く、日本文化との距離を遠く感じているのに対して、習得度の低いグループでは、分散の度合いが一樣ではない。2つの文化の間の距離についてはこの調査だけでは、近いとも遠いとも言えないがAグループのほうがBCグループの平均値より大きい、つまり2つの文化の距離を大きく感じている。

Aグループのような特徴は、Acton や内海の仮説に従えば、異文化適応の第2段階において文化ショックが最も強いときの型である。しかし実際には、Aグループは最も適応に成功した学習者であり、これまでの仮説や研究結果と異なる結果が得られたと言える。

4. この調査の問題点

事前調査として行った小規模なものであるため、この調査には幾つかの問題点がある。

1) 被験者

統計的な処理をするには、被験者の数が少ない。また被験者は全員日本語の学習に志願した留学生であり、元々学習意欲が高い集団であると考えられる。

2) 日本語能力

「III 1 習熟度」で見たように自己申告による能力の評価では、学習者の相対的な日本語能力を知ることが難しい。自己申告による評価の信頼性を高めるためには能力の記述をもっと詳しくすることが一つの解決策として考えられる。例えば、「講義形式の授業が理解でき、テレビのニュースがわかる」より「現代国語／社会／倫理／歴史の授業のやテレビのニュースの80%が理解できる」のほうがより正確な回答を引き出せるだろう。しかしそれでも被験者の性格によって、評価に差がでることは避けられない。被験者全員に標準的なテストを実施することが最終的な解決であろう。

今回の調査では、被験者の来日前の日本語の能力や既習／未習をとわずに1月時の習熟度によって学習者を分類した。しかし言うまでもなくスタート時点の能力が異なる学習者を到達度だけで比較するのは正しくない。もっと被験者の数が多ければ、既習者と未習者に分けてそれぞれの習熟度によってグループ分けをすることができるだろう。

3) PDAQによる社会的距離の測定

今回の調査ではPDAQによる社会的距離の測定に関しては先行研究で示唆されたような結果は得られなかった。むしろ新しい仮説の可能性を示唆する傾向が見られた。これはテストの方法にも原因があったと思われる。一つは被験者の数が余りにも少ないこと、もう一つはこのテストを郵送で行ったことである。この調査の被験者は全国に散らばっており、対面調査が不可能であった。郵送による調査では十分に説明を行うことができない上、被験者の疑問や質問に対応することができない。そのために被験者が回答する際に戸惑いがあったようだ。

PDAQは一つ概念について二つの形容詞のセットを提示し3つのレベルでの距離の判断を求める。回答の方法が複雑でわかりにくかったこと、またいくつかの概念とそれぞれの形容詞の中に答えにくいものが多かったことが被験者を混乱させた原因の一つであろう。例えば、「女性」という概念を、つよい、よわい、という二つの形容詞によって判断しなければならないとき、体力的に強いのか、自立した女性という意味で強いのかあいまいである。また人間関係という概念にソフト、ハードという形容詞を与えられたとき、それがどのような意味合いにおいてソフトなのかよくわからない。実は被験者がS、C、Jの三つのレベルを同じ意味合いで考えるのであれば、ある概念からどのような意味合いのことを連想したとしても社会的距離の測定に差はでない。

方法の問題以外に、異文化理解を目的として11か月を過ごした留学生の中には、ステレオタイプについて回答させられるのではないかという警戒心から回答を拒否した被験者もいた。このような複雑な調査は調査者が被験者に会って十分に説明する必要があるだろう。

IV 結論と今後の課題

この調査の課題は、1.情意要因の中でよい学習者を特徴づける要因はなにか、2.社会的距離と習熟度の間に関連はあるかの二点について調べることであった。習熟度によって二つのグループに分けて、外国文化に対する開放的な態度、日本人に対する肯定的な態度、日本語に対する肯定的な態度、統合的動機づけ、道具的動機づけ、親の肯定的な態度、日本人になりたいという願望、日本人との結婚に対する肯定的な態度について平均値をみたところ、習熟度の高いグループの学習者は習熟度の低いグループより、外国文化に対する開放的な態度を持ち、日本人と日本語に対して肯定的な態度を持っており、より強い統合的、道具的動機づけを持っていることがわかった。しかし親の態度、日本人になりたいという願望、日本人との結婚に対する意識は、習熟度と関係しないようだ。

習熟度と情意要因の相関関係をみると、日本語学習の目的は日本人の友達を作ること、色々な活動に参加できるようになることという統合的動機づけ、外国語を話せるようになりたいという願望、日本語は重要な言語であるという意識という3つの項目に習熟度と関連が認められた。さらにこの調査では対象にしなかったが、この調査の被験者についてみる限り、学習者要因の中の言語環境（家庭での多言語使用）や他の外国語学習歴が習熟度と関係があるようである。これらについては今後の調査の中で取り上げてみたい。

社会的距離と習熟度の関連については、この調査では習熟度の高い被験者はすべて自文化により近く、日本文化から遠くに自分自身を置いていて、2つの文化間の距離を遠く感じていることが示された。統計的に意味のある事例数がないので結論を導きだすことはできないが、先行研究で示唆された傾向は、日本における留学生の日本語習得の場面には必ずしも当てはまらないのではないと思われる。今後は今回の事前調査で得られた傾向を手掛かりとして、日本における高校留学生の日本語習得というテーマを言語の習熟度と社会的距離の関連について量的、質的な研究によって明らかにし、さらに異文化適応と言語習得についてBrownを始めとするいくつかのモデルの検証をとおして新たなモデルを考えていきたい。

- 付記1 この調査は、1993年度のICU 研究助成基金の補助を受けて行った研究の一部である。
- 付記2 統計処理にあたっては、ICU 語学科のThrasher教授に御助言をいただきました。お礼を申し上げます。
- 付記3 この小論をまとめるにあたって、紀要編集委員会の飛田教授、稲垣教授、鈴木先生に貴重な御意見をいただきました。記してお礼を申し上げます。

[参考文献]

- Acton, W (1979) Second language learning and perception of differences in attitude, Unpublished Ph.D.dissertation, University of Michigan
- Au, S (1988) A critical appraisal of Gardner's socio - psychological theory of second - language(L2)learning, *Language Learning* 38 (1), 75 - 100
- Baker, C (1988) Key issues in bilingualism and bilingual education, Clevedon, England; *Multilingual Matters*.
- Bogardus, E. (1953) *Social distance*, Los Angeles, Calif.
- Brown, H. D. (1980) The optimal distance model of second language acquisition, *TESOL Quarterly* 14 (2) , 157 - 164
- Brown H. D. (1987) *Principles of language learning and teaching*. Prentice - Hall, Englewood Cliffs, N.J.
- Dornyei, Z (1990) Conceptualizing motivation in foreign - language learning, *Language Learning* 40 , 45 - 78
- Ellis, R (1985) *Understanding second language acquisition*, Oxford University Press
- Gardner, R (1980) On the validity affective variables in second language acquisition: conceptual and statistical considerations. *Language Learning* 30, 255 - 70
- Gardner, R (1988) The socio - educational model of second - language learning; assumptions, findings, and issues. *Language Learning* 38, 101 - 26
- Gardner, R and Lambert, W (1972) *Attitudes and motivation in second - language learning*. Newberry House, Rowley, Mass.
- Giels, H. and Byrne, J.L. (1982) An intergroup approach to second language acquisition. *Journal of Multicultural and Multilingual Development* 3, 17 - 40
- Hamayan, E, Genesee, F, and Tucker, G (1977) Affective factors and language, *Language Learning* 27, 225 - 41
- Konish, M. (1990) Changes in motivation for English language and learning; a series of four measurements. *語学教育研究所紀要* 4, 1 - 23
- 小西正恵 1994 「第二言語習得における学習者要因」『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』、小池正夫（監修）、S L A研究会（編）、127 - 146、東京、大修館
- Larsen - Freeman, D and Long, M (1991) *An introduction to second language acquisition research*. Longman, N.Y.
- Lukmani, Y (1972) Motivation to learn and language proficiency, *Language Learning* 22, 261 - 73

- Macnamara, M (1973) Attitudes and learning a second language. In Shuy, R and Fasol R.(eds.) Language attitudes: current trends and prospects, pp,36 - 40.
Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Ramage, K (1990) Motivational factors and persistence in foreign language study, *Language Learning* 40: 189 - 219
- Schmidt R. and Crookes, G. (1990) Motivation: reopening the research agenda. *Language Learning* 41, 469 - 511
- Schumann, J (1978) The relationship of pidginization, creolization and decreolization to second language acquisition, *Language Learning* 28, 367 - 79
- Schumann, J (1986) Research on the acculturation model for second language acquisition. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 7, 379 - 92
- Skehan, P (1989) Individual differences in second - language learning. Edward Arnold, London
- Spolsky. B (1969) Attitudinal aspects of second language learning. *Language Learning* 9, 271 - 85
- 内海由美子 (1989) 「日本語学習者の文化適応に関する一考察」 筑波大学地域研究科、国際学修士学位論文
- 内海由美子 (1990) 「日本語学習者の文化適応について」 *日本語教育論集* 7、38 - 58、 国立国語研究所日本語教育センター

QUESTIONNAIRE 1

your name _____

I Evaluate your language proficiency by putting x in the .

- a I can communicate at home and with friends on survival basis (shopping, asking the way, giving directions, ordering meals, etc.)
- b I understand teachers' talk at skill classes (music, PE, etc.) / homeroom.
- c I understand TV variety show programs or contemporary dramas.
- d I understand most of lecture type classes or TV news.
- e I can read simple stories or short notes.
- f I can read 50% of homeroom handouts or basic information at school.
- g I can write simple notes with mostly hiragana.
- h I can write cards and simple letters with kanji.

II Indicate, by circling the number 1~5, the extent to which you agree or disagree with the statement.

strongly disagree disagree neutral agree strongly agree
 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5

1. I am very satisfied with my language progress.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
2. I enjoy meeting/talking with people from other countries.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
3. Learning foreign languages is fun and important.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
4. Japanese people are friendly and hospitable.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
5. I want to speak Japanese like a native speaker.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
6. Learning Japanese is not necessary for me because I can communicate in English most of the time.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
7. Studying Japanese is important for me because it will enable me to better understand and appreciate Japanese culture, art, literature, and society.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
8. When I go home, I will give up studying Japanese.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
9. Studying Japanese is important for my future career.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
10. Studying Japanese is important for me because it enables me to make friends and participate in various activities.
 disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree

11. Studying Japanese is a waste of time.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
12. I would rather spend time on learning about Japan than learnin the language.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
13. I want to learn as much Japanese as possible.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
14. I wish I could read Japanese newspapers and understand TV fully.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
15. I want to come back to Japan soon in the future.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
16. I wish I could speak another foreign languages.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
17. I do not mind if I marry a Japanese person.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
18. I would like to becomer a Japanese citizen.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
19. The more I get to know Japanese people, the more I want to be fluent in the
Japanese language.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
20. My natural parents encourage me to learn Japanese.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
21. My natural parents want me to come to Japan.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
22. The Japanese is one of the most important languages today.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
23. I like Japanese culture and society.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
24. I do not wish to come back to Japan in the future.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree
25. If I have a knowledge of Japanese, I will be respected in my country.
disagree 1 _____ 2 _____ 3 _____ 4 _____ 5 agree

QUESTIONNAIRE 2

The purpose of this part of the questionnaire is to determine your ideas, what you think the people of your country feel, and what you think the Japanese people generally feel about a certain concept (person, thing, system, etc.). In answering this section, you are asked to rate these concept on a number of scale. If the word friendly describes your ideas and impressions about the concept strongly, then you would place your check-mark in the column S, as follows.

		strongly	somewhat	slightly	neutral	slightly	somewhat	strongly	
friendly	S	<u>x</u>	:	___	:	___	:	___	unfriendly
	C	___	:	___	:	___	:	___	
	J	___	:	___	:	___	:	___	

And if you think the word unfriendly somewhat (but not strongly) describes the ideas and impressions of the people in your country, you would place your check-mark in the column C. And If you think neither of the words describes the Japanese people's ideas and impressions, you would place X in the column J.

friendly	S	<u>x</u>	:	___	:	___	:	___	unfriendly
	C	___	:	___	:	___	:	<u>x</u>	
	J	___	:	___	:	<u>x</u>	:	___	

In answering this part of the questionnaire, work quickly and don't stop to think about each scale. It is your immediate impression which is important.

	1. woman				2. marriage											
strong	S	:	:	:	:	:	:	necessary	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								weak	un-							
								necessary	necessary							
respected	S	:	:	:	:	:	:	good	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								not respected	bad							
								good	good							
	3. your country				4. divorce											
strong	S	:	:	:	:	:	:	necessary	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								weak	un-							
								necessary	necessary							
important	S	:	:	:	:	:	:	good	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								bad	bad							
								good	good							
	5. religion				6. children											
important	S	:	:	:	:	:	:	strong	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								weak	weak							
								strong	strong							
necessary	S	:	:	:	:	:	:	active	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								inactive	inactive							
								active	active							
	7. Japanese people				8. old people											
warm	S	:	:	:	:	:	:	wise	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								foolish	foolish							
								wise	wise							
logical	S	:	:	:	:	:	:	respected	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								not	not							
								respected	respected							
	9. human relations				10. future											
new	S	:	:	:	:	:	:	safe	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								dangerous	dangerous							
								safe	safe							
soft	S	:	:	:	:	:	:	happy	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								unhappy	unhappy							
								happy	happy							
	11. language				12. high school students											
direct	S	:	:	:	:	:	:	happy	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								unhappy	unhappy							
								happy	happy							
changeable	S	:	:	:	:	:	:	active	S	:	:	:	:	:	:	:
	C	:	:	:	:	:	:		C	:	:	:	:	:	:	:
	J	:	:	:	:	:	:		J	:	:	:	:	:	:	:
								inactive	inactive							
								active	active							

13. Japan
 strong S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : weak
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

14. father
 wise S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : foolish
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

respected S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : not respected
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

respected S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : not
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : respected

15. mother
 wise S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : foolish
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

16. alcohol
 necessary S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : un-
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : necessary

respected S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : not respected
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

right S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : wrong
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

17. TV program
 important S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : un-
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : important

necessary S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : un-
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : necessary

right S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : wrong
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

like S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : dislike
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

19. workers
 happy S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : unhappy
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

20. family
 important S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : un-
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : important

strong S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : weak
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :

warm S _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :
 C _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : cool
 J _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ : _ :